特251
33

十三年四月六日銅像除幕式擧行ノ日

男爵 青山胤通先生（略傳）

苗木町銅像建立委員編

始

特·251
33.

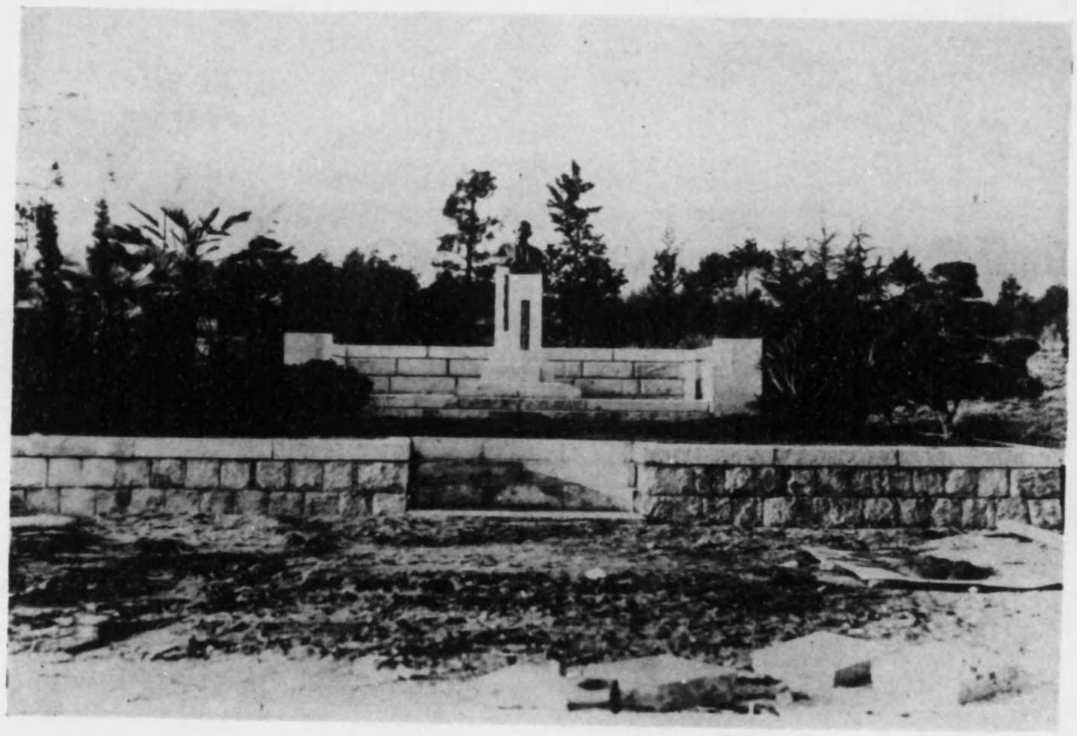
目次

一、青山先生寫眞（口繪）
一、青山先生銅像寫眞（口繪）
一、青山邸舊趾と現在苗木小學校の略圖
一、はしがき
一、銅像の出來上るまで
一、銅像後面青山先生略傳
一、青山家舊邸構へと家風
一、青山舊邸間取り圖
一、青山先生家系
一、實父景通氏の歴傳
一、實兄直道氏苗木藩士と疎隔
一、青山胤通先生

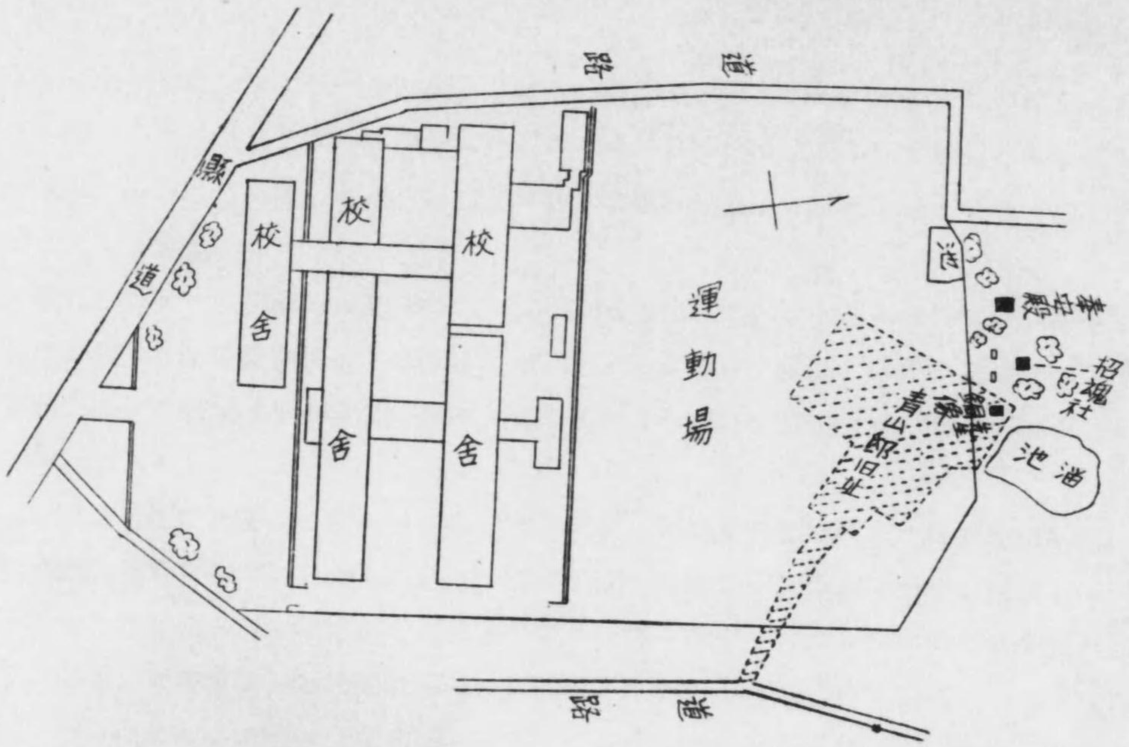
昭和十三年 寄贈 帝國圖書館

男爵 青山胤通先生寫眞

青山先生銅像寫眞



青山邸舊趾と現在苗木小學校との略圖



はしがき

苗木町の生んだ偉人青山先生を敬慕し、其の功績を永久に偲ばんとする事は、郷里として決して忘れて居たのではなかつた、去る十五年祭のときも發案運動したが、具體的に形に表すといふ點になると、そこには色々こみ入つた事情もあつたので、徒らに星霜の流れるまゝに、餘義なくせられた。

偶〻隣村出身而も青山先生を深く敬慕いたさる林直助博士から青山先生の二十年祭を好機として、之れが發祥地記念物を建立したら如何と、すゝめられた。時に町要路の町會はこの議を練つて、可成ならば銅像を先生舊邸趾に建て、其の資金は主として濃飛關係の有力者間の寄附に仰ぐことと決議した。

そこで先づ林博士を中心に青山先生御生前の知友（大島陸軍中將閣下、飯野穩田行者）門人達（稲田、眞鍋兩教授）貴顯（入澤前待醫頭、郷男爵等）を訪ねて御意見を承つた處何れもこの企に贊意を表せられ青山先生の人格識見技倆等、とても偉い御方で……、其の發祥地を表彰するは、有り觸れた人の表彰とは、格が違ふといふ事を、今更らの樣に話して下さつた。のみならず苗木町として夫れが寧ろ遲きに失すると笑はれたので、返す言葉に苦しんだ程であつた自分達は

斯かる話しを聞き、我がことの樣に嬉しくなつて「俺が町苗木の誇り」の爲に是非この企ての完成を期したいから何分の後援をと懇願した。

青山先生は生れながらにして、たしかに雞群の一鶴であつたに違ひは無いが、幼少のあのいたづら盛りを、阿蒐久留美の泥土をふみ、物淋しい田舍で先考の私塾に藩の群童とまじつて、手習ひ讀書の勉强の餘假〳〵に鬼「ゴッコ」や旗取りの餓鬼大將として、近所近邊を馳け巡られたであらう。其の場所が今の小學校運動場の北隅一廓で青山先生祖先發祥地に當るのである。今この由緒極めて深い發祥地に先生の銅像を建設するといふ發起人の趣意は、苗木町の歴史と共に青山家舊邸趾を永久に保存し、併せて我鄕黨人士として永く先生の偉大なる德澤を憬仰せしめ、延いては崇祖愛鄕の心より眞に發奮自覺心を起さしめ、第二、第三の青山先生を誕降せしめんとの念願に燃ゆるに外ならないのである。

昭和十二年十二月二十三日

銅像の出來上るまで

醫學界に於ける世界的內科學の泰斗青山先生の銅像は旣に東京帝國大學の構內に安置せられ、こゝにいそしむ學生は勿論一般の人達に對し不言不語の間に精神の糧を與へてゐる。苗木町亦青山先生頒德の方法を念じて久しかつたが彌ゝ今度先生の舊邸趾に銅像を建設することになり、銅像の工作は斯道の重鎭である東京新海竹藏氏に依囑した。氏は東京帝國大學構內建立の先生銅像が氏の伯父卽ち彫刻界の權威者故新海竹太郎氏の名作で其の鑄像原型作品は不計も破毀せられ、ために餘儀なく其の型を帝大內の銅像に倣ふ事とし、新海竹藏氏は「之れを模作しても自身の體面は汚すまじ」と云はれ快諾せられ大學總長に請ふて其の許しを得、丹念を籠められて複作仕上げられたのである。從つて帝大の構內にあるそれと槪略同型なれども、それに氏の新意匠を加へられた。而もこれを創作者新海竹太郎作としてあるのはこんな經緯あればである。銅像座石の正面には男爵青山胤通先生と題し、後面に先生の略傳が刻されてゐる。同傳は林博士の原文を元侍醫頭入澤達吉先生の監修を受け其の書は名古屋醫科大學大島助敎授の揮毫を乞ふた。

此等に由りて銅像は現下技術の最高を盡して落成を告げた。又資源の大部分は濃飛出身知名士の篤志寄附を仰いで出來上つた極めて意義深い銅像である。此の山間の小天地にこれ程立派な銅像が出來上ると云ふのも畢竟青山先生遺德の偉大が然らしむる處である。

銅像後面青山先生略傳

先生安政六年五月十五日を以て、江戸麻布苗木藩の下屋敷に生る、幼名捨松後胤通と改む、文久三年父母に伴はれて郷に歸る、明治十五年東京大學醫學部の業を畢へ獨逸に留學し內科學を專攻す、後東京帝國大學教授に任し、醫科大學長たること十有六年の長きに及び天下の重望を負ふ、人格崇高識見卓越而して桃李其の門に滿つ、大正六年十二月勳功に依り男爵を授けらる、其の二十三日病んで薨す、享年五十九、頃者鄉人胥謀り先生の胸像を青山邸の舊趾に建て以て永遠の記念とす。

昭和十二年二十年祭の日

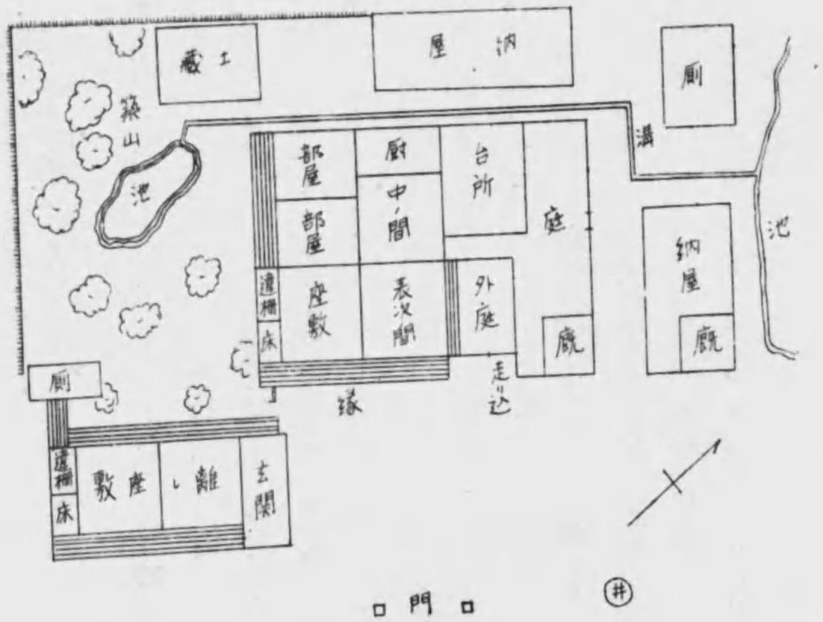
青山家舊邸の構へと家風

先生の舊邸は明治九年火災に歸し已に六十餘年を經、其の構築の詳細を知ることは甚だ難事であるが、今古老の言を綜合して之れを見るに文久三年江戸表から實父景通氏歸鄉後大に家の修理を加へられ、一丈餘りの高き門、石垣は櫓礎形に築き、一尺五寸角欅の門ありて夫れを潛ると右側に車井戸があり、建物は總べて平屋造りの板葺である。間仕切造作は本居は辰巳に面し、この右傍と裏に納屋を附し、丑方の溜池には養鯉の群游するのを見たと言ふ事である。申酉の方角に土藏があり、門の左側に玄關造り八疊二室の離れ座敷を建て、之を繞つて本家座敷部屋先に望んで餘り石を配しない築山があり、躑躅・高野槇・「ヒバ」の植込は高塀を以て圍まれたりと云ふ。其の構造美と言ふ程では無かつたが屋後(現奉安殿一帶)の鬱蒼とした松杉の大樹と調和して眞に「おさむらい」屋敷の模範として申分なかつたと言ふ事である。

家風としては耕馬を養ひ下僕・下女を雇ひ農作を營ましめ、農閑期には薪を村の總山に採り、厨には諸味を釀して溜を汲み、桾木の灯に藁履を編み、打綿を伸べて地機にて機織りを營ましめ三伏の土用には蚊遣りを燻して唐臼を搗くなど、質素勤勞の家憲は嚴しかつたと言ふことである。

青山舊邸間取り圖

(古老想定圖)



青山先生家系

先生を語る順序として先づ家系を敍するの必要がある、先生の祖先は美濃國八幡城主青山侯の家臣であつた。寶曆年間郡上騷動に加はり、後に青山權三郎と云ふ人が惠那郡高山村知原(現在福岡村大字高山字知原)に移住し、寶曆末年卽ち三代目澤右衞門に至つて初めて苗木藩に仕へ、夫れ以來代々遠山家の錄を食んだ。澤右衞門の二男良作が分家して其の子亦良作と稱し、良作の子稻吉が卽ち先生の實父景通氏に當らるゝのである。

實父景通氏の歷傳

景通氏は遠山家十二代の藩主友祿公の奧方榮綱院に仕へ、江戸表に住むこと數年、文久三年に至り、一家を擧げて苗木に歸られた。生來學者肌の人で就中國學の造詣深く、大師流の書道に長し平田流の皇學に歸依し、排佛を稱へ切支丹禁制以來國敎の觀を呈した佛敎を退け、神道擴張に熱心であつた爲め勢ひ佛敎徒の反感を招いた。廢藩置縣に當つても神道の信仰から大義名分論に立脚して高潔な態度を執つた爲め藩士等からは餘り快よく思はれなかつた。然し其の逸材なるは上に認められ、明治元年徵士として召されて神祇省權判事に起用された。小藩出身者として斯く

重職に任ぜられたのは異數の拔擢と云ふ。其の後神祇省は廢せられ帝都は東京へ遷されたので、一旦鄕里苗木に引退、明治十四、五年の頃更らに居を東京に移され、明治二十四年十二月享年七十三を以つて景通氏は東京胤通先生邸に歿せられた。

在職中の或日屬僚を引具して淺草觀音の正體檢分に臨まる處役僧が之を拒んだ爲め「敕命に背くか」と大聲叱咤せられたりと、此の一事以て氏の性格を窺ふに足るであらう。

實兄直道氏苗木藩士と疎隔

先生に二兄一姉がある、長兄名は佐次郎後に直道と改められた。明治維新に當り庶政革新所謂廢藩置縣の制を布かれ藩主を知事とし、大參事、權大參事、少參事、權少參事、主事以下の役を置かれた。明治元年十月直道氏は年齒僅かに二十四歲で苗木藩大參事に擧げられた程の傑物であつた。直道氏は藩政改革に大に意を用ひ、我が國體の尊嚴を明かにし、尊王論を鼓吹し、維新の創業に當つては「常職の無い士卒が常祿を食むの不論理」を主張し他藩に卒先して藩籍奉還を主張せられた。此の頃苗木藩の歸農は最も理想的とせられ公儀から褒詞を受けたものである。直道氏は父景通の志を繼いで、排佛毀釋を實行し、領內雲林寺外二十四ヶ寺を廢して之を辨官に開申した。又新律綱領によつて罪科を咎めること極めて嚴しかつた。

之より先き苗木藩傳統家柄主義上流士族の一味は直道氏が若輩を以て藩政の重局に當るのを快よしとせずして氏の施政に對し事每に沙上偶語を放ち反對の態度を表した。恰も明治三年一月十一日直通氏は反對者に對し「大小參事呪咀、其の上身分押領せんと相巧らみ云々」となし其の反對の擧に連座したものを捕へて糺問苛棘を極め、悉く嚴刑に照した、其の上奸謀企ての者として同八月朝廷に伺上、御札附濟で、裁許となつた。此の間に牢死するものもあり、東京刑務省へ護送の途中橫死するものもあつて、囚獄令吏に引渡されたものは僅か一人となつた。巷間流言蜚語、四面楚歌の矢先に殆ど强制的に歸農せしめたと言ふので、從つて自ら藩中に怨嗟の聲が滿ちた。蓋し時勢から見て王政復古、倒幕の矢叫に世間が動搖めき渡つた後とは云へ此等刺戟の左まて尠ない山間の城下町だけに當然來るべき運命として對處されたこの擧も之を士族の側から云へば實際生活を脅威されたのであるから無理からぬことでもあつた。

果して還祿後は士族概ね生活に窮し、年一年と荒み行く狀態に陷り、其の不平精神は酵釀して終に之れが爆發し、明治九年十二月二十八日靑山邸の燒討ち騷動となり、同邸は瞬時にして灰燼に歸した。

序に苗木藩歸農當時の願書及び御沙汰書を錄し以て當時の狀況の參考としよう。但し一般士卒より願出でた歸農願の書式は今文獻を得ない、けれども當時職を有したものの願書は次の樣であ

る。

臣某頑愚不肖の身を以て藩臺の重職を蒙り敢て其の職に勝へすと雖も偏に廳命を奉し爾來黽勉盡力仕候得共固より無智短才の微臣一藩の可否曲直を糺察し以て其の職掌を竭すこと能はず深く恐懼の臻に御座候方今大御變政の機に膺り奉職罷り在り候ては猶更奉恐入候間何卒當職被免歸農仰付被下置候樣伏て奉懇願候　再拜頓首謹言

明治三庚午年閏十月

何　某　印

主辨事　御中

御沙汰書

藩　廳

時勢を辨知し御旨意を體認し歸農願出候段神妙の至りにて猶不日可否申達候事

庚午閏十月

歸農聞屆濟沙汰書

時勢を辨知し御主意を體認し何某に下賜候扶持米返納願出神妙の事に付聞屆候事

庚午閏十月

苗木藩廳

閏十月次の御布告があつた。

一、歸農願出候者難遊向其實取調來十五日迄に可申出被仰出この御沙汰書に依り願出たるものに

一、先般歸農御願仕候得共私控への田地無之差當り活計の目的無御座候此段御屆申上候　以上

閏十月

主辨事　御中

何　某　印

當時歸農を強要する一面其の後の窮極を察知して前記の樣に實情を取調ふる御布告も仰出され匡救善處に意を用ひた跡が無いのではなかつたが、何分お扶持離されと云ふ物神共に失つた衝動に比べたら、其の反感を償ふ術もある筈無く双方捨鉢的の結果を招來したものもあつたと傳へらる。明治三年末直道氏大參事の職を辭さんことを請つて許された。

後になつて藩籍返上の避け難い事は皆悟る處であつたとするも、藩有土地などの措置及び家祿奉還の手續きに至つては何樣遺憾の嫌があつた。其の一例として、

一、城趾一帶所謂お城山は維新後大藏省に引上げられ遂に御料林となり後請願して遠山家に(有料)拂下を受けた。

一、若山鳶岩須其他、他邑に散在の山野も概ね御料其他に引上げられてしまつた。

一、藩士卒の没祿にあつては明治三十年法律第五十號家祿賞典祿處分法に基いて祿高整理、公債下付出願、同三十九年九月三十日付願意採用給與せられたけれども、其の支給額は各士族が藩制施行當時の實際食祿高に比らべると非常に減少のものもあり、所謂賞ひ不足となり又は家祿を有したと言ふ證據無いのを理由として除外されたるものもあつた。

果して之等の因緣を直ちに時の大參事直道氏の獨裁所業であると、轉嫁論斷することの當否は暫くおき苗木藩士と直道氏の疎遠を釀したのは、之等遠く廢藩當時に其の端を發したのである。直道氏は大參事の職を辭してから栃木・靜岡縣に奉職、西南役後警視廳小警部拜命、九州へ差遣次て郡制施行に當つて岐阜縣大野池田郡長(揖斐郡)に任ぜられた。氏が大參事であつた頃の處業を恨むものに鈴木某と云ふものがあつた。明治十三年四月二十七日直道氏郡衙退廳の途を襲ひて刄傷を加へた如き暴擧もあつた後、直道氏は富山縣に轉任、當時は藩閥全盛の時代で如何に材幹に長じてゐても薩長の背景がなくては官界に驥足を伸せなかつた。而して遂に民間に下られた。之より先直道氏は廢嫡となり、分家し退官後は東京に出て易を學び餘生を送られた。其の易斷するところ百發百中總べて掌中に物を指す樣であつたと云はる。

次兄順平氏(後正幹と改む)は幼にして出で佐藤氏を嗣ぎ、後故あつて養家を去り更に一家を興して小山と稱し神祇省及び靜岡縣に奉職、官を罷め後東京に移られた。姉君琴子と呼ばれ惠那郡、中野方村近藤專一郎に嫁せられた。斯樣に二兄何れも別家せられたので家督正系は三男の胤通先生が繼續せねばならぬこととなつた。

青山胤通先生

青山先生は父景通氏が藩主奥方御附人として江戸出仕中、安政六年五月十五日麻布廣尾の下屋敷に誕生せらる、幼名を捨松と言ふ四十二の二つ兒であつた。古來苗木藩では四十二の二歳兒は親の命を奪ふと云ふ迷信が固く信ぜられ、殊に藩君奥方共に非常な迷信家で一旦捨子にせよと勸められたので、父景通氏も之れに從つて捨松と名附け、同藩の中根助右衞門の門に鯉節を添へて捨てた、それを見た中根氏は之れを拾つて助松と改め、後復た生家に引取られた。假令形式にもせよ迷信の犧牲となつて一旦他家門前に捨てられた嬰兒が後年我が國否世界的醫學界の大立者にならうとは、當時何人も夢にも思はは無かつた所であらう。

文久三年五歳の時父母に伴はれて苗木の舊邸へ歸られた、翌年母を失はれたので伯母縫子の手に鞠育せられた。伯母縫子は父景通氏の姉で一旦他に嫁したが事情あつて婚家を去り、以來寡婦で青山家に在つた、男勝りを以て藩中に知られた。青山家燒討の時など何人にも援けを乞はず、身を紋服に更め傳家の寶刀を守り一物の家財をも出さうとせず、神色自若として家の燒け崩るる

を眺めて居つた程の女丈夫である。先生は此の伯母縫子の感化を受けて不羈剛邁な資性は自ら啓發培養せられた。幼年時代父の寺小屋の如き塾に教へを受けたが、嚢中の錐は頴脱し何處かに他の兒童と異なる所があつた。明治元年父の任官と共に京都に赴き父と同じく神祇省に出仕せる秋田藩士平田信胤（篤胤の孫）より懇望されて翌二年十一歳で東京本所柳島の平田家に入籍、名を胤通と改め、養家に在りて國學を修めた、或時平田鐵胤翁（養祖父）が夜中突然次の部屋に寢て居た先生を呼んだので先生岸破と跳ね起きて、翁の寢所に行つたが餘程遽かであつたと見へ眞裸で床に潜り込んで居たにも氣附かず、裸身に袴をつけて居たので翁が苦笑して注意すると、流石に剛情な先生も我に返つて顏を赤くされたと云ふ事である。先生平田家にあること二年で養父信胤歿し、養母亦去られ、養祖父の四男が家を嗣ぐこととなつたので兩家合意の上、青山姓に復し一旦鄉里苗木の父の許に歸られ、翌明治五年笈を負つて上京し、壬申義塾及び進文學舍に獨逸語を學んだ、出鄉に際し國風一首を詠した。

『ゆくすゑは雲井をしのぐ櫻木の
花咲く春を待ちて見よ人』

青雲の意氣躍動せるを見る事が出來る、時に年十四であつた。明治六年大學專校三等豫科に入つて醫學專攻の道程に上り、越えて明治十四年父景通氏は苗木を引拂つて、東京に移られ同棲す

ることとなつた。明治十五年四月同級生二十數名中第三位を以つて醫科大學全科を卒業。時に二十四歳である、同年五月十六日東京大學御用掛、醫學部病理學教室補助に採用せられ、ベルツ教授の下に內科助手となつた。翌十六年醫科卒業生中より臨牀方面の留學生二名を海外に派遣するの議が起るや其の選に入り、三月九日佐藤三吉、藤澤利喜太の二氏と共に獨逸留學の途に就き伯林フリードリビウヰルヘルム大學に於て研鑽を積み在學四ヶ年內科學者として、將た臨牀家として我が醫界に一頭地を抽きんでるの素地を作つた。かうして明治二十年伯林を辭し、歸途巴里大學に於てシヤルコウ博士の教を受け同年八月歸朝せられた。次いで展慕と恩義深き伯母縫子の病氣慰問を兼ねて十五年振りに鄉里苗木に歸省、旅舍葛屋三九郎方に宿られた。年少鄉關を出た先生が、洋行歸りと云ふので簞食壺漿して迎へた。是が先生の苗木へ足を印せられし最後となつたものである。次いで中野方村に姉の緣家を訪ひ、同家に寄寓してゐた伯母縫子を慰め滯在暫くにして東京に歸られた。

同年九月醫科大學教授に任ぜられ、內科講義の一部と外來患者の診療を擔掌せられた。翌二十一年東京府士族小林好愛氏の長女孝子（二十一歳）と結婚、明治二十四年醫學博士の學位を授けられ醫學第一醫院長心得代理を命ぜられた。此の年に長女芳子生れた、同二十五年神田泉橋第二醫院の內科を主管し、醫科大學醫院長を命ぜられた。當時內科の青山、外科の佐藤の名は醫科大學

の双璧と稱せられた。

明治二十七年香港に「ペスト」病が流行して勢ひ猖獗を極めた時、政府から實地研究の命を受け、北里博士と共に六月四日横濱出帆、流行地に至り幾多の危險と艱苦を冒して、二週間に解剖十九體、診察四十五人に及び遺憾無く臨牀竝びに病理學上の研究を遂げられ、將に歸國せんとする六月二十八日端なくも自身「ペスト」病に感染し一時は危篤を傳へられた程であつたが、英國病院の醫官は夙に先生の盛名を知つて、北里博士と共に治療に萬全を盡し、爲めに奇蹟的に死線を脱し、八月末東京に歸られた時、恰も日清戰爭中の事とて歡迎の盛んなること凱旋將軍を待つが如き觀があつた。功に依りて勳四等旭日小授章を授けられ、有志醫師團より記念の銅像を贈られた。明治三十年醫科大學附屬醫院長に補せられ、翌年東京帝國大學評議員を命ぜられ、高等官二等に陞敍、三十三年藥局法調査會員に擧げられ、勳三等に敍し、瑞寶章を授けられた。同三十四年帝大醫科大學長に補せられた。年四十三歳、爾來其の職に在ること十六年間、同學部の中樞を握つて醫科大學諸制の確立竝びに醫育の改善に就いて貢獻する處が尠なくなかつた。同三十五年高等官一等に陞敍、同三十六年五月一日外遊の途に上り伯林を中心として、墺・佛・瑞・露・白・スカンディナヴィアの諸邦から、英國の各都市を歴遊、三十七年四月十一日歸朝、後內科學第一講座を擔任すること故の如くであつた。此の年日露兩國干戈を交へ、朝野騷然たる非常時であ

つた。先生は戰時衞生の不完全を見、陸軍當局に獻策傷病者の診療に從つた。明治三十九年功に依り勳二等に敍し、瑞寶章を授けられた、同年帝國學士院會員を仰付けられ、四十一年陸軍大臣管下に臨時脚氣病調査會顧問となり、大に力を盡す所があつた。同年十二月二十日支那兩江總督兼南洋大臣端方氏が病を得るに及んで、支那政府の名に於て招聘に應じ國賓の待遇を受けて、南京に赴き其の病を診療、轉じて北京・天津・奉天・旅順に遊んで、翌四十二年一月末歸京、端方より報酬として金壹萬圓を贈られた。其の中から旅費、雜費を支辨し殘金五千圓を支那人教育費として早稻田大學に寄贈したので、人々其の廉潔を稱讃しないもの無く流石に先生の面目躍如たるものがあつた。明治四十三年先生五十二歳の時、東北大學教授熊谷岱藏博士の令弟徹藏氏を養嗣子に迎へて長女芳子に配した。翌四十四年鐵道醫務顧問を命ぜられた。

明治四十五年七月　明治大帝の御惱にかゝらせられるや、國の上下を擧げて深憂に包まれた時山縣公爵は宮中に對し待醫諸氏に於て手落ちはなかろうが、更に萬全を期する爲め此の際最新醫學の力を採り入れなければならぬ所以を說かれ、夫れには醫を醫するの技倆を有すと稱せられる靑山博士を出仕せしめなければならぬと獻策されたので、さてこそ先生は召出されたのである。此の光榮に浴した先生は强い責任感を以つて終治し、崩御の日に至るまで如何に渾身の赤誠を捧げ、醫術の最善を盡されたのは想像以上であつた。當時若し先生が宮中に召されなかつたならば

國民は天壽の止む無きの理を悟り得なかつたかも知れぬ。大正元年宮内省御用掛を命ぜられ、昭憲皇太后、大正天皇御不例の際も屢〻拜診を仰せつけられ、赤心の最善を盡し奉つた。

翌大正二年十月十二日先生の教授在職二十五年祝賀會の禮を受けられた。會するもの貴顯、大官無慮六百名の多きに及んだ、如何に先生の德望が甚大であつたかを知るべきである。同年從三位に敍せられ、又獨逸皇帝より星章付赤鷲第二等勳章を授けられた。大正三年大隈内閣が行政整理の爲め、傳染病研究所を内務省より文部省に轉管するや、大隈侯と平素親交深かつた爲め色々疑の眼を以つて見られたけれども、先生は移管後の最初の所長として能く萬難を排し、著々新施設を行ひ純研究機關に改めて、大學に併置した理由を正當化することを得たのであつた。大正五年勳一等に敍し、瑞寶章を授けられた、十一月九州地方巡遊後病を得、箱根に轉地加療、軈て食道狹窄の症狀を呈し、輕井澤に病を養はれた。大正六年十月醫科學長を辭し、十月箱根から歸京十二月病革るや十四日生前の勳功に依り特に男爵を授けられた。此の日小康恩命を拜聽し、天恩の優渥なるに感泣された。

病魔は日一日と先生の肉體を咬み削つて、家人の灑く萬斛の涙も、親朋故舊の熱切なる祈念も門弟諸氏の不眠不休の看護も其の效果無く、十二月二十三日午後終に青山先生、人生の大語は近づいた。この日青山邸は重苦しい空氣に壓せられ、寂として音を絶ち、病室には夫人、令嗣芳子夫人二女通子、愛孫、近親を始め門下の諸氏何れも最後の袂別をなすべく、沈痛の面敬虔の態度を以て枕頭と牀側に居竝び、一同息づまる思ひして臨終の顏を凝視するのみであつた。迫り來る暮色と相俟つて陰慘の氣をただよわす、死の影時々室内の寂寞を破る嘘欷嗚咽の聲「チクタク」と秒時を刻む時計の針の進むと共に先生の生命は刻一刻と縮まつて行くのである。既にして入澤博士の耳より聽診器の外された時、あわれ一代の偉傑青山胤通先生は五十九歳を一期として宵空の星の光を便りに唯獨り悲しい旅路に上られたのである。

時に大正六年十二月二十三日午後四時五十四分、特旨を以て位一級を進められ正三位に敍せられ、翌二十四日醫科大學病理學教室に於て長與博士執刀の上に遺骸を解剖に附した、同二十六日敕使松浦侍從を差遣はされ幣帛を賜はり　天皇皇后兩陛下から紅白絹二匹、祭粢料金三千圓を御下賜あらせられた。

青山齋場に於て隈川醫學部長委員長となり神式を以つて盛大なる葬儀を執行、有栖川宮、久邇宮御兩家を始め大官名流千數百名の會葬を受け谷中墓地に葬られた。

越えて大正九年佐藤三吉博士委員長となり東京帝國大學構内に銅像を建設し、十二月二十三日除幕式が行はれた。

青山先生は近代我國醫界の大御所として芳名千古に輝き、兒童走卒に至るまで知らざるものは

なしと雖も、其の外にも政治家としても卓越した見識を有せられたので若し先生の健康が保たれ今日未だ生存せられたりとせば、我國の醫界保健に、厚生に幾多緊要適切なる寄與を致されたる所ならん、嗚呼我國家の損失とは實に青山先生終焉を被ふの一語である。

最後に一言すべきは、青山先生未亡人大奥様は七十歳にして至つて御健在、嗣子男爵青山徹藏先生帝大外科學教授として一昨年まで在學せられしも眼病のため退職せらる。よし子奥様又健在にて子供達あらせられ、東京本郷區弓町に御在住一家圍欒御繁榮を極めらる。

又青山家御親戚としては本家青山泉氏(三十五)健在にて、建築家として活動せられ、醫學博士近藤正俊氏は東京杏雲堂に在勤せらる。

又青山教室門下各位に於ては東京帝大稲田名譽教授、眞鍋教授、坂口教授等を始めとし、大學教授 有馬英二、今村荒男、確居龍太、大里俊吾、岡田清三郎、加藤義夫、柿沼昊作、熊谷岱藏、吳建、實吉純郎、中川諭、山川章太郎、佐々貫之、三田村篤志郎、前大學教授 加屋隆吉、山田詩郎、中西龜太郎、大學助教授 茂在照、病院長 菊地米太郎、松波寅吉、朝川順、遠藤繁清、酒井和太郎、津田久三、川島慶治、簡野松太郎、前病院長 木村德衛、本雲堂醫長 佐々廉平、日赤部長 五斗欽吾、保險醫長 平松濤平、海軍軍醫中將 雨宮量七郎、國府田中、帝國女子醫學校長 額田普、侍醫頭 八田善之助、前侍醫頭 佐藤恒丸、侍頭 高橋信、內科開業 額田豊、植村尚清、杉原健彦、鳥居邦康、市川興策、馬場辰二、平林幸郎、堀田彌二郎、增田二郎、山田基、渡邊隣二、荒木英五郎、池田泰雄、諫山貞、大村正夫、久賀六郎、小谷野格康、佐々木今朝平、徐昌道、瀧澤靖、長尾美知、林亨、森安連吉氏等、(順序不同)

何れも門下各位は多士齊々青山先生の遺鉢を尊重せらる。

又現在健存せらる御友人としては貴族院議員佐藤三吉先生(外科の頭)八十三歳にて至つて御健康なり。入澤元侍醫の頭、森島京大名譽教授、其の他の御友人としては大島陸軍中將、穩田飯野行者、元滿鐵總裁野村龍太郎氏、井上孝哉氏、川合玉堂氏等の各位が現存せられ、今に至りても懷舊談を承り、發起人幾度か御友情の厚きに感歎したり。

(終)

昭和十三年四月一日印刷
昭和十三年四月六日發行

發行所　岐阜縣惠那郡苗木町役場內
故男爵青山博士銅像建立委員會

發行兼編輯者　岐阜縣惠那郡苗木町苗木三百六番戸　千早正武
岐阜縣惠那郡苗木町苗木六十九番戸　曾我重太郎

印刷者　名古屋市昭和區東郊通七丁目八番地　東崎治元

印刷所　名古屋市昭和區東郊通七丁目八番地　東崎印刷合名會社

終